

待降節・アドベントⅡ礼拝

2023年12月10日（日）

題 「平和の主イエス」

テキスト：イザヤ書11章1～10節

皆さま、おはようございます。

幼児さんびかに「かみさまからのおやくそく」という歌があります。

「♪むかしユダヤの人々は かみさまからのおやくそく 尊い方のおうまれを うれしく待っておりました～」ご存じの方々もおられることと思います。

さて、今日の聖書の箇所は旧約聖書のイザヤ書と呼ばれる書物にある有名な箇所です。

このイザヤも「かみさまからのおやくそく 尊い方のおうまれを」信じ待っていた人だと思います。

イザヤは旧約の中でも有名な預言者の一人です。聖書で言われる預言者とは、未来を予言する人のことではなく、神さまからの言葉を聞いて預かりそれを人々に語る人のことです。イザヤという名前には、「ヤッハウエは救い」つまり「神さまは救い」という意味があります。イスラエルの歴史では紀元前1000年頃、ダビデ王がイスラエル王国を築きましたが、その後、北と南の二つの国に分裂しました。イザヤは、南王国で活躍した預言者です。北イスラエルがアッシリア帝国に攻撃を受けたのち、南王国も危機に直面していました。その中でイザヤは国の行く末を憂い、神の言葉を預かった預言者としてまことの神に立ち返るように王と人々に訴えかけて行っただけです。しかし、時の王は彼の言うことを聞かず王国は遂に滅亡してしまうのです。

イザヤは、神の救いを待望し、イザヤ書は主イエス・キリストの誕生を預言する書物としてキリスト教会では受け止められて来ています。主イエスの語られた言葉にはイザヤ書の言葉がよく出てくるので、イエスもこのイザヤ書を子どもの時からよく読んでおられたと思います。ちなみにイエス時代の旧約聖書は、現代のような本の形式ではなく、それぞれの書物が巻物になっていたようです。

さて、今日の聖書箇所には小見出しが「平和の王」とつけられています。

一緒に聖書のことばに聞きたいと思います。

「1:エッサイの株からひとつの芽が萌えいで その根からひとつの若枝が育ち」とあります。エッサイとはダビデ王の父の名前です。このエッサイも王となったダビデもベツレヘムの羊飼いでした。ちなみに考古学的な視点から「ダビデ」の名が刻まれた碑が発掘されたのです。＜一つの芽＞とか＜若枝＞と使

用されていますが、ダビデ王を指すともとれますが、やがて現れるメシア・救い主を指す言葉として受け止められて来ました。それは、メシア・救い主であり「平和の王」です。ここでの＜株＞という言葉は、「切り倒された株」を意味しているのです。根が朽ちてしまい、生きていとは言えないような「切り株」なのです。このことは、実は栄華を誇ったダビデ王朝が衰え、滅びていくさまを表しているのです。と同時に、人間の作った物は今はいかにすばらしく見えても、永遠に続くということはないことをも語っています。アッシリア帝国がもたらした平和は「アッシリアの平和」と言われます。ローマ帝国がもたらした平和は「ローマの平和」と言われます。しかし、歴史の中でついに亡びました。イザヤの預言は、メシア王・平和の王の出現とそれによって実現される平和、ヘブライ語で「シャローム」のことです。「シャローム」とは平和な状態で民に平安が満たされている状態のことです。人々の日常の挨拶に使用されていた言葉です。

イザヤは軍事力を基礎とする平和ではなく、創造者である神さまに源をもつ平和についての預言を語ったのです。平和・シャロームの完成は、終末の時となることが記されています。しかし、歴史の中でも神の平和を先取りすることはできるように神さましてくださっているのです。それは救い主イエスさまが来てくだ

さったことによる「キリストの平和」です。愛と赦し、感謝と喜びをもたらす平和です。希望によって生きる平和です。この平和は世の終わりまで続くのです。教会はキリスト者たちは、この世の苦難の中にあっても希望を失わず信仰によって感謝して忍耐して生きていけるのです。伝道者パウロも伝道の困難な中にあっても、ローマの信徒への手紙12章12節で有名な「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。」と信徒たちを励ましています。この言葉は、今を生きるわたしたち一人ひとりにも迫る言葉なのです。

わたしは、夜眠りにつく前布団に入った時に覚えている聖書の短いことばを繰り返しています。これはわたしの心の助けに確実になっています。

私はかつて行き詰って、心身を弱らせて四国愛媛県の松山にてりハビリのために半年の間、住んでいた時に、毎日近くにある大学のグラウンドの周りを朝と夕に散歩していました。グラウンドのまわりには大きな楠（くすのき）が植えられていました。その中に、大きな枝が切られたものがありました。しかし、その切り取られた枝から新しい枝が伸びていました。それを発見した時は、心動かされ、深く癒されたことを今でも覚えています。神さまがそのような植物との出会いを与えてくださったのだと感謝しました。神さまは再生の道を倒れ崩れたかのようなわたしに確かに与えてくださったのです。主イエスにつなが

る者たちは、何度倒れても神さまが立ち上がらせてくださるです。そのことを知っている人たちは幸いなのです。ですから、今日のイザヤ書の言葉は、没落と復興を示すことばだと言われるのです。

倒れ、立ち上がって生きる、それが信仰者たちの群れでもあるのです。

2節には「知恵と識別の霊」とあります。これは平和の王の正しい裁きを行う力と言われます。また「思慮と勇気の霊」は、政治と軍事を指導する力、

そして、最も大切な力は「主を知り、畏れ敬う霊」、まことの神を知り、畏れ敬う力なのです。メシアなる救い主、平和の王によって正義と真実を持ってなされる平和な状態は、人間と家畜（子羊やヤギなど）、また野の野獣、自然などとの共存状態の世界でもあるのです。この平和状態はシャロームと呼ばれる状態なのです。旧約聖書の創世記に記されている大洪水以前の状態にも似ているように思えます。

預言者イザヤはただ暗い現実を悲観しているだけではありませんでした。その衰え、没落したかに見える、イスラエル民族、ダビデ王朝から、新しい芽が萌（も）えいで、ひとつの若枝が育つという、待望、希望を忘れることはなかったのです。希望することを忘れない、希望を捨てない。イザヤは待望、希望を語る預言者でもあったのです。神を知り、感謝し、神を信じることこそ、真の平和なのです。救いは来るのです。人間的に見れば、回りは絶望としか言えない状況であっても、イザヤは、主にある希望を捨てることはついに無かったのです。この希望、待望が、時至って、神の独り子イエス・キリストの誕生へとつながっているのです。希望は歴史の中で残り続け、つながって行くのです。私たちの場合、その希望とは主イエスにある希望です。救いは、すでにイエス・キリストとしてこの世に来たのです。

6節～8節。「小さな子供がそれらを導く。」強い者に導かれるのではなく、弱さを重んじる群れなのです。小さな子供に導かれる姿こそが、真の平和・聖書でいうシャロームの姿なのです。それが神さまの御心、思いなのだと信じます。平和・シャロームはイエスにある群れから教会から始まって行くのです。始めていかなければならないのです。それは、教会・家族、地域、社会や世界のあり方にも影響を与えて行くのだと思います。

日本も世界も混沌とした状態の現在、私たちも、このイザヤが祈りと勇気と自分の命をかけて預言した、救いの日の到来と、神による平和が地上に実現することへの熱い祈りと思いを胸に刻んで、神さまからの光に導かれてクリスマスへの待望の日々を過ごしたいものだと願うのです。主は共にいてくださるのです。皆さまの上に主の平安を祈ります。